

ハリエット・マーティーンノウの経済思想 (1)

[翻訳] 暴徒・不景気な時代の物語 (上)

(*Rioters; or A Tale of Bad Times*. 1827. Wellington, Salop: printed by and for Houlston and son, London.)

船 木 恵 子

要約

This paper provides a translation of Harriet Martineau's *Rioters: or A Tale of Bad Times* (1827). I've tried to translate the text in order to understand the economic thought of Harriet Martineau. However, for reasons of space, this is the first half of the complete translation. The original is 122 pages, so I'm including my translation up to page 66 here. The remaining text and description will be included in another paper. The important question regarding this story is whether it was affected by international trade theory, as developed by Robert Torrens and other economists.

Robert Torrens was the economist who proposed the principle of comparative advantage in international trade before David Ricard did. Torrens was a founding member of the Political Economy Club, owner of the influential newspaper *The Globe*, and a prolific writer. Harriet Martineau said that she wrote this story at the suggestion of *The Globe*. My aim in this paper is to examine the roots of Harriet Martineau's economic thought. After the full translation, I present a detailed commentary.

1. はじめに

本稿はハリエット・マーティーンノウの経済思想を理解するうえで、その鍵となる著作 *Rioters: or A Tale of Bad Times* (1827) の全訳の前半部分である。この著作はマーティーンノウにおいては小作品ではあるが、122頁を要しており、本稿において紙面の都合から訳を全部載せることができない。したがって本稿では内容の区切りがよい66頁までの全訳を掲載する。後半の訳と解説は別稿で扱う予定である。

ハリエット・マーティーンノウは『自伝』において

「私の読んでいたグローブ新聞は、最近起きた暴挙、『機械打ちこわし』事件をちょうどいい小説の主題として示唆した。私はまさしく政治経済学という名前を聞いたことがなかったし、意味をわかっていなかったので、この時は政治経済学について書こうなどという恐れ多いことは

考えなかった。私は『暴徒』と呼ばれる小さい物語を書いた。そしてその冊子の成功はダービーとノッティンガムのメリヤス商人とレースメーカーが、私に賃金を主題にした物語を書いてくれと要望するほどだった。それで私はその要望に沿って書きあげ、それに『解雇』とタイトルをつけた。この二冊の成功は傾きかけていたホールストン社を軌道に乗せた。私はホールストン氏のために何ペニーかで売れるような小さな小説をたくさん書き、1冊につき1ポンドずつ受け取った¹⁾。」

と書いている。ホールストン社は彼女が作家として定期収入を得た最初の出版社である。また彼女はこの作品の内容を、読んでいたグローブ紙（ロンドン新聞）の記事からヒントを得たと述べている。グローブ紙は1803年創刊の夕刊紙だが、1820年よりロバート・トレズ（1780-1864）がオーナーとなっていた。

トレズは1819年にエジンバラ・レビューにおいて、ロバート・オウエンが主張する、機械の導入は一般の生産過剰をもたらし、それが労働者の失業を招くという過剰供給説をとる機械論を批判している。トレズはセー（J.B.セー）やジェームズ・ミルが主張する販路説を前提にして、機械導入によって生じる生産と消費の不均衡は、一時的に供給過剰をもたらすので、不景気と失業を生じるかもしれないが、それは永続的なものではなく、部分的供給過剰にすぎないことを主張した²⁾。

このトレズと同じ主張は、ハリエット・マーティーノウによって、この作品の中でナレーターである主人公「私」が打ちこわし運動に加担したブレットと話し合うシーンで述べられている。「私」はオウエンの過剰供給説を主張するブレットに対して、現在の不景気は一時的な供給過剰によるものであり、動力織機の導入による大量失業は生じないことを説明する。「私」はタイムラグがあっても過剰供給は必ず消費先を見つけるので、今を耐え抜くことが最善の策であると述べている。そしてブレットに対して機械の打ちこわしをするのではなく、皆が動力織機を容認して、動力織機工になることで英国が国際貿易に勝ち、次の好景気においては高賃金を期待できると説明する。

またブレットの言葉を借りて、ナポレオン戦争後、不況と好況が交互におとずれていたことを表現している。これは事実を示しており、不況が永続的ではないこと、またこの物語が事実を反映した社会小説であることを示している。マーティーノウはこの時トレズの貿易論やマルサスの過少消費説、またセー法則などの経済学を認識していないが、こうしたマーティーノウの直観的に受容した経済思想は『自伝』において次のように述べられている。

「1827年の秋だった。マーセット夫人の『政治経済学会話』を妹が知り合いから借りてきた。私はそれを取り上げて読んでみて驚いた。私の書いた機械と賃金の物語で無意識ながらそれをちゃんと教えていたのである³⁾。」

こうして彼女は経済学を社会小説に融合する。しかし、文学的なマーティーノウ批判においては、こうした経済学的な背景が読み取られずに、マーティーノウは政治経済学という社会科学を小説に導入することで、現実性を主張していると思わせかけながら、意識的か、無意識かは別として、一方的なものを見方を押し付ける教条主義的側面があると批判されることもある⁴⁾。ヴィクトリアン・ミドルクラスの小説においては、政治経済学は憂鬱なものであり、ディケンズを除いて批判的に用いられる⁵⁾。しかしマーティーノウは1827年において、無意識であっても決して貿易論や市

場論を憂鬱にとらえるのではなく、すぐれた労働者階級がこのシステムを理解し、実践することにより、社会進歩がもたらされるということ、また、すぐれた知識や技術、ノウハウによって男性も女性も高賃金が約束されるということを主張している。

2. [翻訳] 暴徒・不景気な時代の物語 ハリエット・マーティノーウ (Harriet Martineau)

昨年三月、寒い雨の降る夜だった。私はロンドンから乗合馬車でマンチェスターの町についた。町に入ると店がすべてしまっていた。それはこの町にしては異常なことで、私はとても驚いた。女はほとんど外に出ていなかった。男たちは街角にたむろして、一生懸命何やら話し込んで走り回っていた。それはあたかも四方から一か所に結集しているかのようにみえた。たたきつけるような土砂降りの雨の中で、何人かの男は帽子すらかぶっていなかった。そして生活苦が刻まれた顔面には、意欲と興奮が満ち満ちていた。

何が起きたのだろうか、あれこれ考えているうちに馬車は宿の敷地に入った。すぐに私の注意は宿と手荷物に向けられた。私は疲れて空腹だったので、案内された居間で暖炉の火が燃える様子にほっと元気づけられた。私は急いで夕食を注文しようと思った。しかしその時、従業員に私の注文を気づかせることはとても難しかった。宿の中の騒ぎはそれほど大きかった。ついに私はひとりのウェイターをつかまえて私のわきに落ち着かせ、混乱の原因を尋ねた。

「暴動がおきました！暴徒が町に入ってきたのです。お客様」

「それで、今、彼らはこのあたりにいるのか？」

「そうです。きのう何千人もの人々がこの道を行進していくのを見ました。そして彼らは今朝、ここから2マイルほど先の〇〇さんの工場の動力織機を破壊しました。」

「次に彼らは何をしようと思う？」

「〇〇通りのほかの工場を破壊すると聞いています。三十分前に石が投げられたのを見たという人がいます。」

「何か注意することは？治安判事はどうしたのか？」

「兵隊を頼みました。けれどもまだ兵隊はここに来ていません。このところ騎馬兵たちは昼夜を問わず移動し、人間も馬も疲れ果てています。もしかしたら群衆はたやすく兵士から逃げ去ってしまうかもしれない。」

「暴徒たちの目的は何か？何がよくて暴力をふるうのかね？」

「彼らは動力織機が仕事を奪うと思っています。だから彼らは機械を壊すのです。」

「そのうえ彼らは工場から解雇された生活困窮者たちで、今は自暴自棄になっていて、どんな悪さをするかわかりません。申し訳ありませんが失礼しますお客様。皆が私を呼んでおります。」

「直ちに夕食を持ってきてくれたまえ。すまなかった、もう行ってくれ。」

夕食が運ばれてきたときに、私自身の目で事態がどうなっているのか知ろうと、今、まさに攻撃されているという工場の場所を聞いた。

「行かないほうがいいと思います、お客様。」とウェイターが言った。「今夜は危ないです。外に

は暴徒たちがいるので道は安全ではありません。]

「その安全ではないという意味だが、暴徒たちは自分たち同士では攻撃しないでしょう?」

「はい。そのとおりです。ただ今日、強盗にあった人がいます。この町に来たばかりのある紳士が時計を盗まれました。」

この話は私にポケットを空にするように決心させた。私は時計をはずした。でも、私の外に出たいという思いは強く、あえて出発することにした。

何本かの通りを横切ったが、男たちはいなかった。ただ冷たい雨の中、労働者住宅の戸口に女たちがたたずんでいるのを目にした。彼女たちは心配そうに裏通りを行ったり来たりしていた。その時、わずかなランプの明かりが一人の子どもを抱えた若い女の姿を映し出した。それは寒さとみじめさでやつれはてた姿だった。わたしは彼女に声をかけずにはいられなかった。

「失礼ですがこんな寒い夜、赤ちゃんは外にいるよりもベッドの中にいた方がいいですよ。」

「それならベッドを探してみてくださいな。」と女が答えた。

「ベッドが家にないということなのかい?」と思わず私は彼女に尋ねた。

「もし嘘だとおもうなら、部屋の中を見てください。」と彼女は後ずさりした。

「ここはキリスト教徒の人々が住む場所です。こっちは、私たち労働者階級の生活苦の通りです。ここで私たちは飢えと寒さでうずくまったままわが子の死を目の前で迎えるのです。そして親方たちは木と鉄を手に入れて機械を組み立て、本当は私たちが得るはずの賃金をポケットに入れるのです。」

私は彼女が招いたので家の中に入った。小さな部屋に二つの古ぼけた椅子以外に家具はなかった。床は湿っていて汚れていた。ここでは目に映るものすべてが憂鬱でみじめだった。

「この部屋にあなたが住んでいるのですか?」

「ここは私たちの部屋で、私たちはもうすぐ死ぬでしょう」と彼女は答えた。「わずかなパン」と彼女は指さしたさきには、椅子の上に半分残ったパンがあった。

「来週の土曜日までの私たちの食糧です。」

夫婦と、子どものための食糧かと思って「あなたの旦那さん、あなたそして子どものでしょうか?」と言うと、

「そして、私の二人の息子たちです。どうか聞いてください。あの子たちは6か月前までは良い子だったのに、とても変わってしまったのです。これがいたずらだとしたら、あまりにも子供じみていると思います。けれども苦しみの時間が彼らを狂気にしたのです。それが今の私の最大の心配ごとです。」

「あなたのご主人と子どもたちは今どこに?」と私は彼女の言っている意味をよく理解しないうちに尋ねた。

「夫も息子たちも織物工です。」と彼女は言った。「そして今朝から私は彼らを見ていないのです。」

あなたが通りかかったとき、私は息子と夫を探していたのです。わたしはどうしたらいいかわからないのです。明日の朝までにこの子が寒さで死んでしまわないようにしなくては。どうか助けてください。」

「どうやってあなたを助けられるか考えてみよう。」と私。「今夜はお金を使うことはないと思って財布はおいてきてしまったし、これからあなたに食べ物や燃料を買うには時間が遅すぎる。あなたよりも良い暮らしをしていて、今晚あなたたちを留めてくれるような近所の人はいませんか？」

「向かいの家の二階に住む女性なら、彼女の家に暖炉があるのを知っています。窓越しに見たことがあります。彼女なら私を一晚預かってくれるかもしれない。もしよろしければあなたから頼んでください。でも彼女もまた貧しい人ですけれども。」

「それはよかった。」と私は答えた。「さあ、彼女に頼んでみましょう。」

私たちは急な階段を上った。そしてすぐにその老女は、暖かい暖炉の火とスープ、ベッドの半分を提供し、翌朝私が訪れたら、このサービスの支払いをするという約束に快く同意してくれた。その部屋を去るとき、私に同情心を抱かせた貧しき母親の名前を尋ねた。彼女はメアリー・ブレットだと言った。私は彼女がドアをちゃんと閉めてこなかったことを思い出し、なぜ彼女の家に鍵をかけずにきたのか尋ねた。

彼女は彼女の夫が家に帰ってくるかもしれないからだと言った。「盗まれるものは何もないのです。」と彼女は言った。

「前に泥棒にいましたから。ドアを開けておいた方がかえって安全かもしれません。」

私はもはや彼女とよくわからないことをめぐって話し合うことは無用だと考えた。たった一人でこんなひどい生活苦と闘っている今の有様で、彼女をあれこれ非難することは残酷だと思った。だから私は彼女の言うに任せた。だが、今から思えば、彼女を説得して、動力織機の使用を親方の残酷さだと思っている彼女の誤った考えを問いただし、貧しさからわきたった心のいらだちを鎮めるのに役立つ時間を持つべきだった。とにかく私は、その時不幸な彼女を残して暴動の現場に進んで行った。

暴動の現場へ着いたとき、私はその混乱の拡大にうろたえた。騒音は耳をつんざくようで、群衆の叫び声は恐ろしかった。いたるところからきこえてくる女たちの怒りや絶望からの泣き叫ぶ声が私の心に強く響いた。妻が夫の腕にすがって打ちこわしに行くのを引き止めようとするのを見た。夫は大きな石を抱えていた。妻が必死で彼をおさえている間にも、かれは石を投げようとしていた。櫂の棒を夫が妻の頭の上に置いて、家に帰らなかったら、お前の頭をこれで叩きのめすぞ！と脅したとき、私は身震いした。妻がひるんだすきに石が窓に放り込まれて工場の中に入った。その時私は妻が泣き叫ぶのを聞いた。「亭主が絞首台に行ったら、神様私の子どもたちと私をお助けください！」

「おくさん、あなたは家に帰りなさい。」と私。「あなたがここにいても何もできないでしょう？」

「お願いします。夫を止めてください。なんでこんなことをするのか理由を聞いてください。夫は人生を台無しにしています。兵隊が来ます。もし夫が捕まったら私たちはもうおしまいです。」

私は夫の腕をつかんだ。そしてみじめな姿をした彼の妻を指さした。そうすることが彼にとって

一番こたえるだろうと思ったからだ。だが、それはまったく無駄なことだった。彼はもがき、荒れ狂い、私が態勢を立て直す前に群集の中に逃げ込んでしまった。そしてその瞬間、工場の壊された窓に松明が投げ込まれた。投げ込みそこなった松明の火が、私の近くで立っていた小さな子供の衣服についた。小さな子供は恐ろしきで泣き叫んだ。私は自分のコートで子どもを包み、抱き上げて、誰の子どもなのか大声で尋ねた。しかし誰からも返事がなかった。私は群衆から離れて、子供がどこに住んでいるのかを確かめようとした。すると男の子がやってきて、子どもをつかむと、私が何の権利があってこの子どもと一緒にいるのかと訪ねてきた。私はつぶさに、何の権利で小さな子供がほったらかしにされて、群衆に踏まれ、焼き殺される危険にさらされなければならないかと彼に聞き返した。彼は子どもを家に帰してまた戻ると言った。「君は家にいなさい。」と私は言った。「兵隊が来る。家にいれば君はこの事件から逃れられるから。」

私は彼と通り二、三本の距離を歩いた。特に彼は私から逃げようとはしなかった。私たちは元の場所に戻った。混乱はますます大きくなっていった。私は松明を投げつける時の明りで、暴徒たちの恐ろしいほどひどくやつれた様子を見ることができた。

ある青年の動きは、私の注意を特に引きつけた。私は彼が離れた距離から次々と石を窓の中に正確に投げ入れていくのを見た。そして彼が無防備のように見えた1つの窓に向かってつき進んでいくのを見た。彼は壁をよじ登って、そして彼が窓の下枠の上に飛びのったその時、中から棒のようなもので押されたのだ。彼はそれをつかんで、そして猛然とそれを持った人と格闘した。それを見ている他の暴徒たちは彼をはやし立てて応援した。

ちょうどその時だった。馬のひづめのカタカタという音が、そのはやし声と叫び声の最中に聞こえた。瞬間にして、気づくと兵隊が群衆の目前にいた。これが逃げる合図だった。暴徒たちは四方八方に飛び散った。私はたいまつ明かりが照らす薄明るい中で、ぴかっと光る騎馬兵たちが振り回すサーベルが当たらない場所に、体を押しつけてじっと立っていた。私はさっきの窓枠にとりつき、中に入り込む努力をしている最中の若者は、まだ仲間が散り散りに逃げて自分1人が、置き去りにされたことを知らないのだと感じた。

騎馬兵は若者をマークし、馬を寄せて彼の後ろから襲い掛かり、彼の襟首をつかんで、そして地面に彼を引きずり下ろした。彼はもがき、かがんで、そして馬の下へ逃げようとした。馬にけられて死ぬかもしれないという、差し迫った危険の中で、どこからかもう1人の青年がやって来て、こん棒で兵隊を強打すると、兵隊は青年の襟首をつかんだ手をはなし、彼の馬の鞍に座り込んだ。彼は明らかに気を失っていた。

若者たちは共に逃げようとした。私はこの青年二人に逃げてくれと思わずにはいられなかった。彼らの痩せこけた粗末な容姿に、私はまた深い同情を感じてしまったのだ。私は今、貧乏が彼らの暴力を許してしまったのではないかと感じていた。そしてこのような危機一髪の後、なんとかとらえられずに逃げてほしいと思った。

だが、二人は逃げるように定められていなかった。一人の兵士がこん棒を打ち落とし、3人がかりで彼らをマークして取り囲み、馬の下へ引きずり落として捕えた。「すぐ殺せ。飢えて死んでいくのだから、殺してくれ」という彼の叫びを私は聞いた。

彼はとらえられ馬上の兵士の前に乗せられた。彼はけがをしたのか、あるいはただ気を失っているのか、私にはわからなかったが落馬する危険があった。彼を助けたもう一人の青年は同様に捕えられ、保護された。

私はもはや見ていられず、いたたまれなかった。心に何か刺さったような思いで、心底消耗していた。私は逃げ回る暴徒の間を通り抜け宿へ戻った⁶⁾。私はほとんど眠れなかった。たぶん私の心があの晩目撃した、みじめでやるせない場面のすべてでいっぱいだったからだと思う。想像力のはたらいで、外から聞こえるすべての騒音が、騎兵隊のひづめの音や暴徒の叫び声や足音に増幅して聞こえるという有様で、私は一晩中すべての音にびくびくした。天井に反射して光るすべての薄光があたかも私の頭にふれるかのようで、私を悩ませた。夜が明けて日が昇り、私に夢と空想を振りはらって起きるように命じたときには喜びを禁じ得なかった。騒音はなく、あたりは静寂だった。私は次に何をすればいいかを考えた。

いつもの私なら、年に2、3回、商売でマンチェスターにやってきては3、4日滞在する。ここにはほとんど友人はいないし、それほどこの町にゆかりがあるわけでもない。来て商売をして、すぐに帰るといような、仕事がらみで訪れる町である。けれども今回ばかりは私にとって商売は二の次となってしまった。商売のことよりあの貧しい母親マリー・ブレッドが気になり、彼女を訪問しなければいけないと思っていた。私は朝食をとるとすぐに彼女を預けた家に向かった。家の前の階段で、私は子どもを抱いた彼女に会った。彼女はとても血色が悪かったが、昨日の晩のように苦しみ、やつれているようには見えなかった。「おはよう。ミセス・ブレッド。早くあなたと赤ちゃんにお会いしたかった。」と声をかけた。「お気遣いありがとうございます。私も子どもも、昨日あなたが通りかかってくださらなかったことを考えれば、それでもずっと元気です。ほんとうに久しぶりにベッドで眠れましたし、なぜだかわかりませんが、とても長い時間眠ってしまいました。とても遅くなってしまいましたが、夫と子供が帰ってきたか見に行くところです。私がいないので彼らは心配しているのではないかと思いますのです。」

「いっしょに行きましょう。」と私は言い、路地を横切って歩いていった。彼女がドアを押して我々が部屋の中に入ると、男が椅子に座って頭を膝につけてかがみこむようにしていた。我々が部屋に入っても彼は動かなかった。メアリーは彼に向かって何か話しかけたが、彼は答えなかった。メアリーは彼の肩をゆすると彼は目を開け、しゃがれ声で「帰ってきたのか。お前もなくなったのかと思った。」と言った。

「息子たちはどうしたの？」彼の妻が尋ねた。

「どこへ行っても息子たちはもう飢えないさ。」と夫は答えた。

「言ったじゃない！彼らは絞首台へ行くのでしょうか？」と不幸な母親はすべてを察して叫び、もう一つの椅子に座り込んだ。

「それがいいだろう。」夫は答えた。「飢えているよりもずっといい。」「彼らにとって首をつられることはそれほど悪いことじゃないさ。」

「君は間違っていると思う。」と私は思わず言った。「私は君が息子さんたちにしたように、あなたを放り投げようとは思わないよ。ただ君が危険な間違いをしているのではないかということと言

わなわけにはいかない。もし君が暴動を起こすのは悪くないと思いつけるのなら、また君は暴動を起こすかもしれない。それならどうぞ勝手に人生を台無しにすればいいさ・・・」

「話さないでくれ!」と男は言った。「苦しんでいる人間に話す必要はない。もしまた暴動に加わっても、こんな状態じゃ踏みつぶされて、もうここへは帰ってくることはないだろう。お金持ちは暴動について、あなたが言ったように言い、我々に食べ物や暖を取らせてくれるかもしれない。それはとてもうれしいが、でも今はそんな必要はない。」

「君の言葉通りだ。」と私は答えた。「君の隣人になろう。君に暖炉の火と食物を与えよう。それから私はあえて君に暴動についてゆっくり話したい。」

私は通りを再び横切り、メアリーが一晩過ごした老女の部屋へ向かった。私がこの家族について質問をすると、彼女からいろいろと聞くことができた。昨日約束した彼女への報酬が、おそらく期待通りだったので答える準備ができていたのだとわかった。彼女は私にプレット家の人たちが、苦悩の時が始まる以前は、非常に勤勉な、立派な人たちだったと言った。夫が解雇されてから生活はどんどん悪くなったが、彼らの隣人はほとんどそれを知らなかった。メアリーは以前みんなから必要とされる親切な、社交的な女性だった。けれども今の彼女は貧しさのためにひねくれてしまって、何を聞いてもぞんざいな対応しかしなくなったという。彼女の息子たちは穏やかで几帳面な性格のしっかりした若者だった。しかし彼らが解雇されてから、不幸にも社会に危害を与える暴徒になった。グレてしまって3日も家を空けることも珍しくなくなった。隣人たちは兄弟がその後どうなったのか誰も知らないし、彼らの将来はきっと良くないだろうと予測しているという。

けれども家族の中にただ一人、苦しみや誘惑から逃れている勤勉な16歳の娘がいることを聞くことができたのは幸いだった。彼女は母方の祖父と一緒に暮らしているという。彼女はこの家族に襲いかかる破滅を共有していない可能性があるのだ。この祖父は農夫でマンチェスターから数マイルの郊外に住んでいる。彼は貧しいので娘の家族に十分な援助をしてあげられないが、孫娘だけは何とか救いたいと思って、家に連れて帰った。それは彼女の母親がまがりなりにも安全だと考える、最も満足いく方法だったからだ。

私は祖父がどこに住んでいるのか、正確な場所を知ろうと苦労した。そして私は彼に会いに行くと彼が本当にこの苦難の家族のためにこれ以上何かをすることができないのかどうか確かめようと決心した。

それから私は老女に頼んでプレットのために燃料と食料を買ってきてもらい、彼らに暖をとらせ、メアリーが部屋を掃除するのを手伝い、夕食を作ることを約束してもらった。やっと問題が解決されて、私は仕事の商談をするため、幾分か心が軽くなって出かけることができた⁷⁾。実際のところ私にとっては商談の方が、こちらの問題より気が楽だった。私は何軒かの取引先の事務室に出かけたが、私はただ黙って長い間呆然とした顔を見ただけだった。彼らは頭を振っているだけで、私はひとつの注文も手に入れることができず、1シリングも稼ぐことができなかった。

1軒目の仕事先で「注文?」とひとりが叫んだ。「ここには注文できるような仕事がないのです。だれも注文をしません。」次に尋ねた先は「金が…」と叫んだ。「手に入るお金がないので、あなたはどうしたって待たなければならぬでしょう。こちらの支払いが入らないから、待ってほしいと

お願いするのです。』

「もし私が銀行口座で支払いができるならば…」と三番目は言った。「ぜひともお願いします。ただ不可能でしょう。仕事はまだ操業できてない。6か月間は何も支払いはできないでしょうし、同時にわれわれは支払いを受けられない。」4軒目は「お会いできてよかったです。でも私はあなたが、これから3ヶ月間はいらしてもほとんど目的を遂げられないことを心配します。私はあなたが次回いらっしゃる前に、ことが明るくなっていることを期待しますよ。」

5軒目のドアをノックしたとき、私は彼が郊外の工場が打ち壊されるのを防ぐために行ってしまったと聞いた。彼の家族は非常に心配していた。それは本当に憂鬱な一日だった。唯一喜ばしく思ったことは、街角で食料の配給をしていたことぐらいで、私は先に貧しいひとがパンもろくにならないという状況を見ていたので、これはいくらか安心するものだった。

宿に戻ると私は座って妻に手紙を書いた⁸⁾。私は彼女に今季の利益が懸念されること。すでにトラブルや出費が生じており、これについては弁償も無理であると予測できるから、今後私の出張は控えたほうが良いことなど、あれこれと書いた。しかし私は今見たいろいろなことによって新しいことを知ったこと、また日々のパンのありがたみもわかったことなどを書き加えた。私は妻にあてて、子供たちの心にさらにいっそう、日々の必要と常に快適さを与えてくれる神への感謝の義務を教える教育をするように促した。そして家に戻ったら妻の子にたいする教育を尊重することを約束した。帰ったら私は子どもたちに、どれほどかわいそうな何百、何千もの同胞がいたことか、いろいろと話してあげるのだ。

私が留守にしている間、私は何の不安もなく、地域の平和や安全を、また出した手紙に当然ながらすぐに返事か来るだろうことを考えて、そのありがたさを当たり前のことと信じていた。だが、ここに来て、神の慈悲によって授けられたはずの、このひどい分配を考え直す気になっていた。私は昨日、次から次へと、ただ悲しみだけを目にしてきた。そこで私は、多くの人々の悲嘆にくれた感情をつぶさに感じた。しかし誰がこのかなしみをもたらしたのだろうかと考えてみると、実は悪は一方で大きな善であったことを思い出したのである。

「夜もすがら泣き悲しんでも、朝とともに喜び来る⁹⁾」という旧約聖書の聖句をまさに思い出した。そう。賢い政府の下でなら、「涙にくれて種まく人は、喜びを刈り取る¹⁰⁾」のである。

喜びあるいは悲しみにあるとき、人が心を鎮める最も良い方法は全体を見渡し、実際の暮らしの中にあることばで、我々の感情を熟考することである。もし我々がこの法則を観察したなら、我々は今よりもっと喜びを得られるだろう。我々はあとで泣かないために今、涙するのである。我々はこの世界の慣習が永遠になくならないのを知っている。

夜、私は再びブレットの家に行った。彼らの部屋は以前よりも快適になっているのがわかった。床は洗われ、暖炉は燃えていた。きれいな藁が、彼らのベッドのために片隅におかれていた。メアリーは金曜日の明日の朝食のために残してある彼らの食事を見せてくれた。そして土曜日には彼ら

はこの地区の食料の配布を受け取るのである。したがってとりあえずは緊急の困窮の時期はまぬかれたのである。私は今、「暴動」について話をするのに好都合だと感じた。この問題について貧しい人々が、無知と誤りにおおわれていることに改めて不安を感じていた。そして彼らの逆上した行進によって、彼らの親方や彼ら自身をも傷つける困窮の原因となる重大な暴力行為に突き進むことに大いに不安を感じていた。

「あなたとあなたの息子たちは織物工ですか？」

というのが、ブレットに対しての最初の質問だった。

「そうです。私は生涯ずっと織工ですし、息子たちにも数年前から良い技術を身に付けさせて織工にしました。彼らはほかのどんな仕事よりも、はるかに多くの収入を得ていました。」

「それがいつごろから落ち込みましたのですか？」

「景気がわるくなって、なぜか貿易がいつのまにか減りました。そしてそれがいつのまにか復活したのです。戦争が終わったとき、我々はみんなから、さあ稼げるぞ！といわれていた。なぜなら平和になれば貿易が盛んになるからです。ところが実際には違っていました。でも我々はいつも生きていくためにうまくやらなきゃならないのです。去年のこの時期には結構稼いでいましたよ。みんなはそれが最後だったといっています。その時我々は稼ぎを取っておこうとは思っていませんでした。それから全く突然に親方が織物工を解雇したのです。その後我々は一つの仕事も得られませんでした。我々の生活はだんだんと落ち込みました。来週にはいよいよ我々はワークハウスに行かなければならない。それ以外の方法がないのです。」

「私はこの国のすべての織物工があなたがたのようにひどいことになるのを心配していますよ。」

「そうです。旦那、それについて教えてください。頭のいい人たちが、あと一年ぐらいでそんな風になるだろうといっています。私には信じられないが、すべては彼らの言う通りになってきたわけです。」

「それをどうしてその人たちは知っているのだろう。なぜその人たちはそのように思うのですか？」

「機械がそのようにさせると彼らは考えたのです。彼らは木と鉄の機械が我々の代わりに織れば織物工が困窮するのは明らかだと言っているし、確信もしているのです。」

「機械が仕事を始めれば、すぐに織物工は干上がってしまうということかい？」

「そうそう、その通りです旦那。動力織機が導入されたときが最大の不幸だったからです。私は職を失ったし、まあ大体の手織機工は職を失ったわけです。」

「それからどうなったのかい？」

「そりゃ、動力織機工にならざるをえなかった。私はそれでやっと仕事を手にしたわけです。」

「それで不幸は去ったのですか？」

「それほど長くはなかった。みんな動力機械は嫌いですが、手織機工はみんな自分と同じようにした。貿易の好機はすぐにやってきたので、みんなその時には仕事につけたんですよ。」

「木と鉄の動力機械が仕事をしていても？」

「はい。そうです旦那。貿易がうまくいっている時は、雇用は機械も人もあった。しかし、残念なことに、貿易が悪くなると人間には仕事が回ってこないのです。」

「何がそれほど貿易を活発にしたのかい？」

「さあ、私が聞いているのは、それにはたくさん理由があるということです。今は平和な時代ですが、生活苦は以前より大きくなっているのだから、私はまったく信じられないのですが、ある人は平和のおかげで貿易がよくなったと言っています。またある人はイギリスが外国の工場を圧倒しているからだとも言っています。我々の製品は外国のものより質がいいですからね。」

「君はどの理由だと思ふのかい？優れた製品のおかげかい？」

「いやいや旦那。そりゃ値段でしょうよ。」

「ほかの国の製品より安いということかい？イギリスの工場はどうして外国の製品よりも安く売れるのかい？まさか利益なしで売っているの？」

「違いますよ、旦那。イギリスの工場はとてもいい利益を出していますよ。でも、わかるでしょう旦那。外国では動力織機を使わないし、我々の製品よりも質が悪いとか言って、親方は手織機よりも動力織機を使ってたくさん仕事をこなし、ほかの国より安い価格で売って儲けているんですよ。」

「それで？他の国がどこも持っていない動力織機を使って、我々は外国製品を圧倒しているというわけだね？機械化というのは貿易を復活させる原因だったね。」

「そうですね、旦那。当面はそうだった。当面はね。頭のいい人たちはそれがそのあと、どうやって我々を解雇するかを予言していたけれど、我々にはそれがわからなかった。それが最後だったということすらわからなかったんですよ。でもそれが今だってことが分かった。残念だがこの国のすべての動力織機は打ち壊されると思いますよ。」

「それで君はそれが今の不幸の原因だと思ふのかい？」

「確かにそうだとおもいますね、旦那。誰もがいい面しか見ていなかったのかもしれない。親方たちは大きな利益をあげるとそれでまた取引を拡大し、どんどん市場が在庫過剰になるまで増産しつづけ、いまや誰も買わなくなりました。在庫は余ってみんな抱え込んでいる。もし手織機職人を続けて雇っていたら必要以上に在庫を増やすこともなく、俺たちも仕事があったのに。」

「もし外国製品が君にそうさせていたら？覚えているだろ？君は確か巨大な市場でのイギリスの支配力は動力織機に負うところが大きいと言ったはずだ。市場がもし今のような過剰生産の状態なら、それは一時的な不幸じゃないの？いずれははけるだろう。だが、我々の外国製品に対する優位性は永続的に持ち続けるんだよ。もし我々がその座から滑り落ちたらどうする？どっちにしても、どこの国の人だってみんな人々は布地を必要とするわけだ。だから、いつかは君が作った布地を買う必要があるんだ。やがて君たちの製品や外国製品はまた競争をはじめ。君は動力織機が君たちに対して、前の時にした同じような利益を与えることにまた気づくと思うよ。」

「旦那、それにしてももう遅すぎます。もし我々がここで死に絶えるのならば、取引の復活などは必要ないでしょう。もし親方が手織機を続けるならば、我々はまた職を得るでしょう。それなら今の状態よりももうちょっと選択肢があるだろうが。」

「友よ、君のその考えは間違っていると思うよ。もし親方が手織機を継続するとして、我々ほどではないが、いくらか機械化しているような外国の製造業者は、我々をここぞと市場から追い出すかもしれないよ。その場合、一生懸命努力しても良くなる希望もないまま、今のように我々の生活はどんどん悪くなっていくはずだ。そのとき、我々の唯一のチャンスはその相手と同じ機械化をするしかないはずだよ。そう。だからね、我々は結局、彼らと同じ境遇なんだよ。我々は今、市場がうまくもどるまで、ただ待ちさえすればいいのさ。そして徐々に良くなれば、次に我々がかつて市場を制覇したように、我々が再び制覇できることに気づくだろう。でも、もし我々の動力織機を廃止してしまうなら、我々の貿易は永久に復活することはないだろう。」

「それがどんなことなのか、私にはよくわかりませんね。」とブレットは言った。

「もし動力織機が壊されて親方たちが設備を整えるのに費やす資金を失ったら、そしてほとんど全部の資金を失ったら、今度は誰も雇用されなくなるだろう。そうすると親方の財産を壊した暴動とは、実際は景気がよくなって自分たちの手に入るはずの金を無駄にしたのと同じことになるのだよ。もし親方に資金があれば、動力織機をまた導入し、織物工を雇い、技術者や大工も雇うだろう。もし彼らに損害を修復する余裕がないのなら、当然のことながら彼らは商売がつけられなくなるだろう。どっちにしても職工は滅亡する。その時、遅きに失するが、彼らは自分たちの親方自身に災いをもたらしたことが分かるだろう。」

ブレットはこの見通しに衝撃を受けたように見えた。彼は少し間をおいて

「だが、もし豊かな親方たちが貧しい織物工が動力織機を設置させまいとするのを見たなら、彼らはその使用を断念するのではないですか？ そしてもし資本のない業者が取引から追い出されるなら、それは手織機を確立するためには価値あることでしょうか？」

「君は現実にほとんど気づいていないね。」と私。

「打ちこわしはもっとも厳しい法律を破る犯罪行為であることは言うまでもないことだ。親方の財産を破壊して、今、親方は君たちになすままにされているかもしれないが、そのことがどれほど君たち自身の首を絞めているか僕は示すことができるよ。動力織機を扱うような人は非常に技術的にも優れた専門家であるはずだ。でも彼らだってみんなと同じように生活をしなければならない。もし彼らのような優れた人々がこの国で雇用されているのなら、万事すべてうまくいく。彼らだって満足するし、我々はもっとより良く生産することができるし、そして外国製品より価格が安いという長所だってある。だが、動力織機が壊されて、彼らがもはやこの国で雇用されないとすれば、彼らが外国に行くのを引き止めることができるだろうか？ 大喜びするのは外国企業だよ。彼らをいい値で雇えるからね。我々はやがて市場競争から追い出され、我々の過去の貿易は哀悼されるのさ。もうそうなったら取り戻すには遅いよ。」

「でも手織機の織物工は残るとは考えられませんか？」

「それはほとんどないよ。」と私は答えた。「もし我々が貿易をやめたら、前にも予測したように、我々の経済は年々縮小していくだろう。外国企業が世界市場を牛耳り、我々の国はどんどんしぼんでいくよ。今『ほとんどない』と言った意味はこのことさ。たとえば、思うに君は動力織機工がいなくなった工場から雇われるとする。君は動力織機工のかわりに雇われるのだろうか？」

「そうです旦那。それにもしすべての動力織機が廃止されたなら、もっと良いでしょうに。」

「なるほど。機械はすべてなくなったでしょう。つまり君の親方は100人の雇用を用意して、そして君はほかの99人と共に雇われる。取引が活発になると親方は事業を再開するだろう。そうすると経済は良くなるから一年かそこらは、親方は君にひっきりなしに仕事をくれるようになる。技術者も大工もみんないなくなっている。君はもう機械のことなんか耳にすることはないだろう。それで君は非常に満足していて、そして、木と鉄がもう人間がすべき仕事をしなくなった今、すべての困難が終わったと思っている。

だが、しばらくすると親方から商売を続けていくには価格の値下げが必要だが、そのためには君の賃金を下げなければならないという知らせがくるだろう。親方はコストダウンを考えるけれども製造コストを抑えることは難しく、結局君の賃金を下げるしかなくなる。君は、それは困るからほかの工場で働きたいというだろう。でもどの工場でもそれは同じことだと最終的に気がつくはずだ。

だが、いったい誰がそんなに安売りしているのかな？ おや、そうだった、外国企業だった。『なんだって、外国企業！』君は叫ぶだろう。『我々の企業の方が優れているはずだ』君たちがそれを担ってきたんだものね。でも今は違う。外国企業は動力機械の素晴らしい改良を成し遂げて、安価な良品を生産することができるようになったのさ。

えっ、どのようにして彼らは動力織機を改良したのだろうか？ そう、イギリスの技術者たちが、この国でやったようによその国で動力織機をせせせと開発したんだよ。

『ああ、そうゆうことなら、彼らの繁栄は長く続かないでしょう？ 今の我々みたいに過剰在庫になるはずだ。そしてそれが消費されるまで待たなければならないだろう。今の我々みたいに』と君はいうだろう。でも君の賃金はその間にもどんどん下げられて、親方も商売ができなくなって従業員の解雇、そしてついには倒産。そこに至るまで、君は生活苦に締めつけられる。でも君は外国の貿易がうまくいっていないことに満足しているよね。君は過剰在庫というものをわかっている。もし時が過ぎて一時的な在庫が消費されて、またうまく貿易がいくようになればまあ、いいけど。でもダメだ。貿易が復活すると、外国企業はもっと良品を安価で市場に出せるようになる。君はむなく生活苦の中でこの時を待っていたことに気づく。もうその時には君たちの商売は永久になくなっているのさ。」

「旦那。それは何事においてもひどい。俺たちの将来は真っ暗じゃないか。」

「機械化をやめるといふのなら、私の意見としては、今言ったことは、当然予想しなければならないだろうね。」

「だが問題は、もし我々が機械を使用し続けても、旦那。それと同じぐらいにひどい状態だという事実ですよ。」

「私はそうは思わないよ。確かに今、商売は良くない。だが市場が過剰になった生産物をはき出したら、親方はまた小さな規模でも製造を始めるだろう。私は君がわずか50人の動力織機工と共に工場に雇用されるだろうと考えるよ。君の親方は君に外国企業は製品の洗練さや値段の安さについて、我々には追いつけないということを知らせてくれるだろう。君の親方は自前の製品を、よい

利益を上げて、全部売りあげることができる。そしたら親方はもっと人を雇い、もっと織機を導入して、おそらく10年たった時には、最初わずか50人だった従業員は300人、いやいや400人ぐらいの規模になっているだろう。ほかの製造工業も同じように景気がよくなって、さらに人々は雇用されるだろう。国全体にお金流れ出し、人口は増加し、商業は拡大する。貿易は確実にこの国の足元を固める。大事なこと。基本中の基本というのはね、真のそして永続した国家の繁栄にあるんだよ。」

「今の話はとても素晴らしいが、旦那、これは本当なのかい？」とブレットは尋ねた。

「旦那はこんなわたしより、はるかにわかっていらっしゃるが、旦那は本当にそう思っているのですか？機械化したままでも貿易が盛んになると？」

「景気が落ち込むときは時々ある。」と私は答えた。「そう。すべては人間のおこす問題なんだから、いろいろ変動はあるだろう。だが私は思うんだ。今君に話した機械化する場合としない場合の2つの社会システムの方向性というものがあると信じている。」

「でも旦那、外国企業が我々の技術力に追いつくほど進歩しなかったら？」

「彼らは間違いなく進歩するさ。でもそのことは我々の国の産業を常に前進させる。国際的な変化、技術や産業構造の進歩、不便や貧困の原因究明などに対する可能な限りの改良を、我々に成し遂げさせるには彼らの進歩はなくてはならない。じっと苦難の中で待ち、その結末を見る辛抱強さを持つ人々は、長い目で見れば善が悪よりもはるかに大きいことを見いだすだろう。機械による紡績が最初に導入されたとき、手で紡いで生計を得ていた多くの女性たちが仕事を機械に奪われて苦境を訴えた。彼女たちにとってはとてもつらいことだったが、こうした機械化が、おそらく彼女たちは想像もしなかつただろうが、100人、いや、それ以上の雇用を彼女たちの子孫にもたらした。一人が解雇され、それが後に時がたてば100人の雇用を生み出すのならば、概して大きな利益といえるだろう。」

「確かにその通りだ、旦那。それはとても素晴らしいことだ。」

「それは素晴らしいこと。そう素晴らしいことだよ。だが、もし賢明で、しかも辛抱強いリーダーたちがそのことを考え始めなければ、これは決して気がつかないことさ。もしここで暴徒となっている貧しい人々がほんのちょっとでも真実を理解したなら、自分たちがしたことを後悔するだろう。動力織機は親方同様に、自分たちにとっても価値があるってことがわかるだろう。みんなと同じように親方だって、どんなに現在の景気停滞に苦しんでいるかきつとわかると思うよ。後でみんなは騒動と暴力をおこしたことが、やがては自分たちの手を通るはずだった金を、他の道筋に変えてしまったことがわかるだろう。そして彼らが機械に対して、いっそう多くの損害を与えると、修理に時間がかかり、再び彼らに雇用を与えるようになるのが前より長くなるということもわかるだろう¹¹⁾。」

「この話を私の息子たちが誤りを犯す前に知っていたらどんなに良かったでしょうに。」とブレットの妻、メアリーが言った。

「そう思うよ。」と私は答え、「さあ、あなたの息子たちに何ができるか考えないと。今朝、私は

あなたの夫が言ったことから彼がまた同じように出ていくことを心配していたが、今は彼がこうすべきじゃないということを確認しているのがよくわかったよ。いろいろな人が考えているように、機械がみんなに害以外の何もも与えないなんてことは確かなことじゃないんだ。ねえ、ブレット そうだろう?」

彼が私の問いかけに答える前にドアが押し開けられ、何人かの男と二人の女が入ってきた。男はやつれてすてばちな様子だった。私は彼らの表情やしぐさから、彼らが暴徒の仲間だと納得した。私がおの場においたので、彼らは多くを語れないような雰囲気だった。私は、ブレットが今のところ暴力に参加しないだろうと強く確信していたので、その場から離れる方がいいと感じた。私はドアの外に出てブレットを呼んだ。

「約束してくれ。」と私。「僕がもう一度君に会う前に、過ちを犯さないことを。」

「明日また来るからね。」

「しませんよ。旦那、私は今晚もう外に出ないでしょう。」

「多分、君はこの人たちが暴力をふるうのをやめさせることができるはずだ。彼らが誰か、このあと何をしようとしているのか、僕にはわからないが、もし打ちこわしを企てているのならば君はそれを止めることができるはずだ。」

ブレットは頭を縦に振って「確かに！」と言った。

「忘れるなよ！」と私は答え、「私が今晚言ったことよりも、もっと言うべきことがある。法律を破って、よく理解もせずに絞首台に行くことがどんなことであるか考えてみたまえ。もし君が逃れてみんなを止めることができたなら、君たち自身で、自分たちを破滅させていたことに皆気がつくかもしれない。でももし君が兵隊に連れて行かれたらすべてを失うんだ。」

私は彼の家を去った。精一杯論ずことができると思った最も重要な考えにはまだ至ってなかったが、私は彼が何らかの良い効果を産み出してくれればいいと期待した。そして私は、彼らの破滅への悪循環を正すまで、この家族から目をはなさない心に決めた。

私は今回の暴力行為によって、取引の利益を得ることができなかったことを指摘するために、すでに精算をはじめていた。将来的にはこの行為の罪とひどい経済的損失を指摘するつもりだった。私が宿の近くに帰ってきたときは夜が更け、暗闇が広がっていた。道路からはわずかな音がきこえたが、昼も夜も道路には騎馬隊の隊列がパトロールをしていた。馬のひづめの音が聞こえ、隊列が私を追い越したとき、彼らの1人が列から離れ、私のすぐ前で止まり、9時以降に私が外にいることについての理由を問いただした。

「私はなぜ外にいてはいけないのですか？」と聞いた。

「行政長官が9時以降の外出禁止令を出したことを知らないのですか？」

「それは知りませんでした。」

「わかりましたね。では家に行きましょう。どこに住んでいますか？」

私は自分の名前、仕事、会社、道順などを述べた。その時私は道端に大砲が準備されているのを見て驚いた。この困難な大事件の結果がどうなるのだろうかかと案じた。昨晚の暴動の目撃者である

私には、このような光景は悩ましいものだった。

大砲など、昨日の加害者がどのように連行されたかを知れば、おおよそ不釣り合いなものだった。この事件の解決策をどこに見出したらいいのだろうか。私にはまさに当惑する問題だった。確かにさっきブレットに言ったように時間と辛抱強さは最も良い解決策だ。しかし生活苦で苦しむ人々に辛抱強さを説き聞かせる方法、生命をやっとのことで維持している人に辛抱強さをも維持するように説き聞かせる方法は、このような困難の時に難しいのではないだろうか。この事件の解決の鍵は優れた織物工にあるんじゃないか。私が見いだすことができた唯一の慰め、私を思い悩ませている疑いと恐れを和らげる唯一の手段は、より賢明な人々の自由な意思にこそあるのではないかと思った。

翌日の朝は輝くような青空だった。私は気分転換のために郊外に出かけたいと思った。そこで私はメアリー・ブレットの父親が住んでいた農家を訪問しようと思った。

私は、煙っぼい、憂うつな町を後にして、きれいな空気と日光の楽しみをめぐしてすぐに馬に乗って出発した。道は全くまっすぐで、直前まで降っていた雨のせいで足首まで泥にはまるような具合だったので、あまりうれしい光景ではなかったが、露を帯びた生け垣は日を浴びてきらきら輝いていたし、丸々としたつぼみは新緑の草木を予測させてくれた。鳥はチーチーと鳴き、羽ばたいて、見たところ、春が近いのを歓迎するかのようだった。正真正銘の自然の愛好家は素晴らしい風景と呼ばれるものでなくても、こんなことがうれしく思えるものだ。広がる空と野菜畑は私を喜ばせてくれた。住民と共に育つ1本の木が、目を楽しませ、思考の食物を与える。山や滝は精神を感情で満たしてくれるようだ。しかしこのような荘厳な対象物、ヤマガラスの群れが住むニレの木、ハチの巣がある日当たりが良い花壇、牛と牧草、サクラソウの群生、セイヨウサンザシの枝など、それらすべては人間の業ではないのだ。だがどんな当たり前の自然の生業であっても、人の心を喜ばせ、和らげるものだ。そして自然の愛が我々に与えることができる程度は、それでも我々に楽しみを分け与えるのに十分である。

今朝、私が感じたような心の楽しみとは、このようなものだった。そしてそれは私がそれまでの数日間にいろいろ経験していたような思い煩いの憂鬱な気分を、そのすがすがしさですっかり逆転させてくれた。

私は何か喜ばしいテーマはないだろうか、馬を操りながら頭の中の考えをあてもなくさまよわせていた。私がかここきて、現在に至り、これからどうしたらいいのか、あれこれ考えを巡らせていたとき、遠くで叫び声するのを聞いた。

それは不吉などよめきであり、群衆の大声というよりも叫び声に近かった。それは暴力と破壊を思わせた。私はすぐに判断できなかったが、その群衆はおおよそ4分の1マイルほど先にいるようだった。だがまっすぐな道なので、私はすぐに黒山の群衆がこちらに向かってくるのを見た。一見して彼らが暴徒であることは疑いもなかった。

私は彼らをよけるために、道路わきに建つ小屋の敷地内に急いで馬を入れた。庭では男が農作業をしていた。私は彼に向こうから来る暴徒たちについて何か知っているか聞いてみた。

「この騒ぎは長くは続かないと思いますよ。1時間ほど前に2人の紳士が急いで通り過ぎました。兵士がすでにこの町に入っているかどうか聞くためにね。ほんのちょっとだけここに立ち止まりましたが、私が何もわからないと知るや、返事も全部聞かないうちに急いで行ってしまいましたよ。」そうこうしているうちに、さらに高らかに響き渡る叫び声が近くで聞こえた。農作業をしていた男は道路の方に走って出て、

「大変だあ！ 旦那、すぐ向こうにやつらが来てますぜ！」

「おーい、おーい！」と妻に向かって彼は叫んだ。「雨戸を閉めるんだ。窓からものはなしてドアに鍵をかけるんだ。早く！やつらがやってきたぞー！」

私は暴徒に出会うことは危険かもしれないと考え、直ちに引き返すことにした。暴徒たちの列はかなり乱れていたが、その速度はとても速かった。私は馬を走らせ、しばらくすると、その場からかなり離れることができた。私は離れてからまだ1マイルに満たないほどのところで多くの兵士たちに出会った。大規模な騎馬隊だった。すぐに近づいてきたので、私は彼らを通過させるために道の片側に馬を寄せた。けれども指揮官は列の半分を先に行くように命令して私にも行くように促した。司令官は私に風紀を乱す暴徒たちについて尋ねてきた。私は約5分前に目にした暴徒と思しき群衆について説明した。すぐさま隊長は振り返って、隊に指示を与えた。私はその時、ついていってすべてを見てこようと決断し、かれらの後方に馬を回した。

隊はすぐに動き出した。指示を与えた数分後、私は「止まれ！」という言葉聞いた。そこには計り知れないほどの多くの人々が我々の行く手をふさいでいた。私には彼らが意図的に立ちふさがっているように感じた。彼らのほとんどは先が尖った棒や丸太棒などを手に持ち、中には破壊してきた機械の破片を持つものやレンガや石を手に持つものがいた。

ほんのわずかな静寂の後、二つの群れは止まり、向き合った。私にはこの次に何が起きるのか想像もできなかった。私は近くにいる兵士に「彼らは逃げる様子はなさそうですね。」と話しかけた。「まったく情けない奴らだ！」とその兵士は言った。「彼らは戦うことも逃げることもできない。見てごらんささい。丸太の棍棒は彼らにとって重すぎて、自分の武器を運ぶことでやっただ。敵をやっつける前に自分たちがつぶれてしまう。」

「皆さんは暴徒の扱いには精通されているとは思いますが、彼らは逃げるつもりはないようです。私は彼らには力よりも呼びかけが必要だとおもうのですが、このような餓死しそうな貧しい人々に武器を使用するのは残酷じゃないですか？」と私は言った。

「我々はわかっていますよ。」と彼は答えた。「我々の仕事はわずかな捕虜を捕まえて、残りを散らし、可能な限り一人も殺し傷つけないのです。我々兵士の行動は今までに称賛に値するものでした。」

私は先の二人が連隊長と牧師で、かつ行政長官であると確認した人物であることがわかっていった。連隊長とこの紳士は直ちに前方へ乗り出した。多くの武器が空中に投げられた。私は石のシャワーを予想したが、それはほんの少ししか投げられなかった。行政長官のメルヴィルは暴徒たちに演説をしはじめた。彼らはメルヴィルの声を聴くとすぐに身構えたが、どよめきは次第に静まった。彼の声は大きく、透明で澄んでいて、群衆、兵士、両方の大群に響きわたった。

「諸君、私の言うことを聞いてくれ。」彼は叫んだ。「ほんの少しの間、我慢して聞いてくれないか。我々は君たちの親方たちがどれほど一生懸命に君たちの苦しみを和らげようとしてきたかわかってもらうためにきた。親方は君たちが餓死するくらいならば財産を処分したっていいくらいに君たちを思っている。」

このとき、彼の言葉はおおぜいの機械廃止の要求によって中断させられた。

「もし君たちが親方の機械を打ち壊すなら、親方は君たちを生活苦から救うことができない。」彼はつづけた。「親方たちは今、動力織機を持たなければならないのだ！」と、ここで再び叫び声が上がった。君たちの親方は今のこの時も苦しみ続けているとメルヴィルは続けた。

「つまり、動力織機を導入しなければ、彼らの貿易は終わってしまうからなんだ。だが、今、親方は自分の損失よりも君たちの苦しみを考えている。君たちは昔、この国で最も金持ちだった人たちが、どんな風にして破産したか知っているはずだ。みんな貿易がうまくいなくなって破たんしたじゃないか。でも親方たちは君たちの苦しみが一番大きなことを知っている。親方は君たちの苦しみに深い悲しみを抱いているよ。もう一度言うておくが、親方たちは君たちと、持っている金の最後の1シリングまで共有しているんだ。むしろ親方たちの方が我慢すべきだと彼らは自制して言うているくらいだ。」

恐ろしいほどの叫び声がかかった。

「なに言うているんだ！こんなふう到我々を踏みつける人殺しを、まさに今、呼び込んでいるじゃないか！」

連隊長がここで一步前を出た。

「我々は君たちを踏みつぶすことを望んでなんかいない。我々はただ、個人の財産を守り、君たちの破壊行為を防ぐために来ただけだ！」

しかし四方八方に飛び散ったレンガのかけらの音が響いて、この騒動の中で彼の言葉はまったく聞こえないようだった。再びメルヴィルが言葉を発すると、連隊長は言葉をゆずった。そして尊敬されるべきこの紳士は、皆が静まるように、手を振り回した。やっと静まると彼は言った。

「君たちは何度も何度も言われてきたはずだ。君たちのこの騒がしいやり方が法律を破っているということをわかっているはずだ。行政長官は君たちの苦しみこそがこの行為をもたらしただけに気づいているぞ。もし君たちが、今、暴力を振るうことを思いとどまるのなら、君たちを許そう。みんな今、自分の家に戻ることをいとわない。これは君たちの今の苦しみを救うのに最もよい方法だ。警告しておこう。君たちは今朝定められた「暴徒法」を読んだね。君たちが逃げる時間はもうわずかだ。ここで今、結論を出す必要がある。もし…」

ここで石が話し手に投げつけられた。石は馬上の行政長官をかすめた。彼はひるんだが、バランスをとりなおし、振り返って、すべての忠告が激怒している暴徒には無駄であることを理解し、兵士たちと共に後退した。騎馬隊は直ちに群衆の中に入り込んだ。群衆は暴力でそれに応酬した。棍棒と尖った槍が騎馬隊の馬をねらって投げつけられた。多くの傷を負ったが、騎馬兵たちの活躍は見事だった。彼らはサーベルの平らな方だけで暴徒たちに応戦し、馬を注意深く扱い、最小限の負傷にとどめた。今でも思い出すと恐ろしい情景だった。私はこの混乱の渦中において、この恐怖が早く

去り、群衆が四散してくれないかと願っていた。

このとき私は何度か襲われそうになった。男が私の手から手綱を奪い取り、私の後ろに乗り上げたので、死に物狂いの格闘となった。私は何とか自分の手綱を死守して、後ろにいた男の首をとって前に引きずり落とそうとした。男は憐れみを請うたが、

「そんなものに値するか！」と私は言った。

「私は暴動など起こしていない。私は見に来ただけだ。あんたが私の前に馬で立ちふさがっていたからやったまでだ！」と言ったので私は彼を放してやった。見ると彼が生け垣を飛び越えて、全速力で逃げていくのが目に入った。そのほかにも騎馬兵と戦うのが無理だとわかった人々が彼と同じように走り去っていくのを見た。兵士たちの一部がすでに道路の両側の生垣を飛び越えて、1つか2つの牧草地を越えて、後ろから暴徒たちを攻撃することを命じられていた。この作戦は有効だった。すでに後から到着していた兵士たちの警告音が鳴り響くと、群衆が逃げる群れと化した。するとたちまち生け垣は取り壊され、そして広場は逃げ惑う人々によって踏み固められた。たくさんの指示がされていたが、私には待ち伏せする位置まで正確に計算されていたと思わずにはいられないくらいの見事な早業だった。私は明らかに首謀者と思しき10人ぐらいの男がグループになって行き交っているのを見た。彼らは逃げ道を特定の方向へ変えるように話していた。一部の違う方向へ行った男は気づかれないために迂回しているのは明らかだった。私は時に生垣の下をくぐり、時にジグザグなコースをたどりながら、結局、彼らが同じ方向へ向かっていることを確認した。私は馬に飛び乗りすぐにこのことを指揮官に伝えた。彼は直ちにメルヴィルに彼らが向かった方向に工場がないかどうかを尋ねた。行政官は少し考えてから、道に沿って行けばここから7、8マイルはあるだろうが、この牧草地を横切ればMR.〇〇氏の工場への近道になるはずだと答えた。

「時間の猶予はない！ 彼らはきっとそこにいるはずだ」と連隊長は言った。隊を整えるように連隊長が言うと、部下たちは馬も人も疲れ果てていることを訴えた。だが交代要員が期待できるまでは、もう一度奮い立たなければならなかった。連隊長は暴徒を追いかける方向を指摘し、直ちに行くように命令した。しかし誰かが問題の工場はすでに近日中の攻撃が予測されていたので、すでに警備されていたことに気づくと、

「そんなことは問題ではない。」と連隊長は言って「彼らに休息を与えてはならない。新しい計画をする時間を与えてはならないのだ！ すすめ。」と言った。彼らは直ちに動き出した。そして私はその場に取り残された。そこで私は最初の目的だった農家を訪ねることにした。

ここからわずか3マイルほどの距離である。暴徒たちは完全に離散して、もはや私の身に危険が及ぶこともなかった。私は日光に反射する兵士たちのサーベルの輝きを見て、彼らの前進する姿をたどっていた。私は身に迫った暴力の兆しを見逃さないように、また破壊、あるいは絶望の叫びを聞こうと、どんな小さな音も逃すまい、どんなものも見逃すまいとしていた。なぜなら今見てきた場面が私の想像をかきたてていたからだ。

「こんなことがイングランドであるのだろうか？」私は思った。「今まで秩序ある幸福な繁栄を遂げている我が国において、私は優れた社会秩序は取り戻せることを信じている。取り戻す第一歩は、彼らの今やっている暴力こそが、彼ら自身の永続的な破滅をもたらしていることを納得させる

ことである。」

私は探し求めるたった一つの思いを馬上で思い描いていると、健康的で元気そうな少女が戸口から現れた。「あなたはブレットさん？」

「はい。ハンナ・ブレットです。」

「おじいさんはご在宅ですか？」

「いいえ。畑へ行っています。もしよろしければお入りください。夕食には戻りますので、さほど待たないで会えますが。」

私は小さいけれど手入れのゆきとどいた家に入った。ごくふつうのランカシャー労働者住宅だが、室内はきちんと整理されていた。テーブルは夕食のために清潔な布をかけて準備がされていた。ハンナは私に椅子をすすめ、私の要望をうけて、窓際にすわって彼女の針仕事を再開した。彼女の針さばきはとても速いように思えた。

「裁縫はお母さんに習ったのですか？」と私は尋ねた。

「はい、そうです。私が家にいたころはたくさん繕いものをしていました。自分のも父や兄たちのもの。」

「ここでは縫い物をしなくてもたくさん働き口がありそうだけど？」

「この辺ではほとんど仕事は見つけれないわ。」とハンナ。「女の賃仕事は自分で生み出さない限り、たくさんはないもの。でも自分で裁縫をしない人は、私が仕事をすれば喜んで支払いをしてくれる。たくさんではないけれど。でも2、3シリングにはなるわ。」

「ではお金を稼いでおじいさんを助けているのかい？」

「いいえ。祖父は私にとって必要なものは与えてくれます。なぜなら祖父は私と一緒にならば家事をする人を雇う必要がないから。祖父は私にここにいなさいといいます。なぜならこのような生活は私にとって織物工場にいるよりも良いからだというのです。もし私が祖父から離れたら織物工場に行かなければなりません。もっともっと父や母のために働かなければならないのです。だから私にはこれでいいのです。」

「あなたのご両親を助けたことはないの？」

「助けています。この3か月で私は編み物で15シリングを稼ぎましたが、私は昨日それを持っていこうとしました。でも祖父が行かせてくれなかったのです。町は今暴徒たちがうろついているので安全ではないと。」

「残念なことに君のお母さんは今お金がない。悲しいことにそれを必要としているだろう。」

「まあ、私の母に会ったのですか？母はどんな様子でした？家族はどうなりました？」

私はこのご時世だから、あなたの家族は大きな苦悩を抱えているが、お母さんは元気であることを話した。

「それが私の祖父が決して私を戻さないわけなのですね。」とハンナ。「私は家族のみんなにこの数週間ずっと会いたかった。でも祖父はいつも私をそうさせなかった。何かわからないような理由で…。」

老人が家に戻ってきて、私を見て驚いた。

「おじいさん！」とハンナ。「この方が、私のお父さんが不幸の渦中にいると言っているわ。」堰を切ったように彼女は泣き出した。

「ハンナ？この方はどなたかな？」

私は挨拶をし、名前を名のって、あなたと少し話がしたくてやってきたと伝えた。しかし急いでいるわけではないのであなたが食事をとるまでお待ちすると言った。彼は承諾して私を食卓へ招いてくれた。そしてハンナに向かってやさしく「悩まなくていいんだ。」と言った。

「みんなこんな時代を悩み苦しんでいるんだよ。でも再び世の流れが変わるまで、我々は耐えなければならぬんだ。」

「おじいさん。私は分かっていました。それが町へ行かせない理由なのでしょう？」

「そうだよ。二週間ほど前だった。お父さんが解雇されたと聞いたのは。私はお前に言わなかった。それを聞けばお前を不幸にさせるだけだと思ったからだ。お前にはどうすることもできないことだから。」

「私は一生懸命働いてもっとお金を稼ぐわ」とハンナは答えた。「お前の15シリングをすぐに送ってやろう。きっとよい助けになるだろう。それから我々に何ができるか考えてみよう。」

老人が食事をしている間、私は彼からこのあたりの情報を得ることができた。彼が食事を終えてハンナに片づけを言いつけて遠ざける口実にすると、私は私の要件を切り出した。私は彼がまったく彼の家族が耐えている苦悩に気づいていないことが分かった。それは老人をとっても苦しめるものだった。彼の孫息子たちが暴動に加わって監獄に入れられているという知らせは彼にとってひどく辛いものだった。老人はとても貧しいので、孫たちを助けるすべがないと言った。こんなひどい時でなければ、彼の小さな農地の一部でも売って孫たちの訴訟費用を工面できたかもしれない。けれどもこんな景気の悪い時に誰も田舎の農地など買わないだろう。そしてこの老人には貯えもなかった。

私は今保存してある自給用の食料を町で売り歩いたらどうだろうかと提案した。食料を町で売れば、結構喜ばれてすぐに稼げる。老人は提案を受け入れて、隣人から荷車を借りて、ジャガイモや、自家製ベーコンなど自給した食品をバスケットに入れて自分が行商に出ることを決意した。ただ、老人は暴徒によって攻撃されることを恐れていた。私はもし1時間ぐらいでその準備ができるなら、一緒に町まで同伴することを申し入れた。彼はこの申し入れを受け入れ、バスケットの準備をさせるために、ハンナを呼んだ。ハンナは自分が家に居残るのを残念に思いながらも、慣れた手つきでテキパキと行商に出る老人のために準備をした。ハンナの祖父は彼女を連れて行って、あのみじめに落ちぶれた家族を見せることを、あえて不必要だと考えたのだ。そしてその思いは私も同じだった。私は老人が荷車を借りに行っている間に、彼女に話をするために小屋に入った。

「さっき言わなかったかな？この辺の女の人は編み物をするのがないみたいだけど？」

「はい、そうです。織物工として育てられる女はしばしば手芸を教えられないのです。」

「あなたは、それをとても残念なことだと思っているのでしょうか？」

「そうです。私の母もそう考えています。だから母は私に編み物を教えたのです。織物工としての技術しか持っていない女は景気が悪くなると時勢に合わなくなると母は言っていました。」

「確かにそうだね。残念ながら、もし景気がよければ、家でやるような物づくりや、修理などはみんな外注に頼るだろうね。」

「母は妻が織物工であってもなくても、夫や子どもの世話をするものだということをよくわかっています。ほんのわずか織物工として稼ぎがよくて仕事があっても、何時かしら景気は悪くなるものです。私は不景気で解雇された女を知っています。その人は若いうちはずっと織物業界で雇用されていて、とても仕事のできる稼ぎ手でした。でも彼女は女主人に自分の家族が生活苦であることを話しました。女主人が見に行くと、家には私よりも年長の3人の女の子がいるのに、ただぼうっとしているだけ。何もしないのだそうです。女主人は彼女たちに働きなさいと言ったのですが、彼女たちは縫い物ができませんでした。それではと、編み物をしなさいと言われてもできない。洗濯も、お茶を入れることすらできない。娘たちは何も知らなかったのです。彼女たちは唯一、母がやっている機織りができたのですが、女主人は彼女たちに手機織りの仕事を与えませんでした。結局彼女たちは多くの手機織工が解雇されているのを見て編み物を習おうとしました。でも彼女たちの技術はひどいものでした。」

「技術のない女が編み物でどうして稼げるのですか？」

「本当に優れた編み物職人はとても良い稼ぎ手になります。でも良い編み物職人は、今とても少ないのです。」とハンナは答えた。

「あなたのおかあさんはよい編み物職人ですか？」

「もちろんです。あなたにお見せしましょう。」と言ってハンナはおじいさんの靴下を取ってきて私にそれを見せた。私が見た限りではこの編み物はとても良くできていた。

「それでは、ハンナ」と私。「君の15シリングを材料の仕入れに使わないか。私は君のお母さんに6足の男性用靴下の注文をする。三か月後にまた来るのでそれまでに用意しておいてくれないか。」

ハンナの目が喜びで輝いた。彼女は私に礼を言い、仕事をもらえることは何よりもうれしいことだと言った。

老人が荷車と共に帰ってきた。ハンナは中にお金を入れた手袋に母への編み物の注文のメッセージをつけて老人に渡した。そして何度も家族についてのたくさんのニュースを持って帰ってくるように老人に頼んだ¹²⁾。

(以下 67 頁から 122 頁は別稿で扱う。)

3. 本稿における若干のまとめ

本稿において「私」が主張する「一時的」な不景気による労働者の生活苦は、前述したトレンド

の一時的供給過剰論に加えリカードゥ経済学における旧機械論とほぼ同じ主張である。リカードゥは『経済学および課税の原理』の第3版(1821)において、新機械の導入が労働者の失業をもたらすことを31章に新しく書き加えた。リカードゥは初版(1817)と2版(1819)において機械の導入は、労働者に失業をもたらさないと主張していた。しかし3版31章においてリカードゥは、機械の採用は商品価格の低下をもたらし、全社会階級に利益がある一方で、それは労働者にとっては有害になることがあると述べている。このようにリカードゥは当初の「機械無害説」だけでなく、「機械有害説」という考え方を第3版において新たに加えた¹³⁾。19世紀初頭における技術革新と労働者階級の雇用をめぐる諸問題がいかに重大な問題であったかが理解できる。M.ブローグ(1958)は4章において「リカードゥ派の完全雇用論」(Ricardo on full employment)を論じ、技術的失業の問題は初期の古典派経済学では、ほぼ貯蓄=投資と考えられ、この場合資本蓄積の過程では生産過剰は生じないという「供給はそれ自身の需要をうむ」というJ.B.セーの販路説が主張されていたと述べ、リカードゥは当初「ミル氏の理論¹⁴⁾」と称してこれを受け入れたと分析した。

マーティノーウは、このことを知らないで著作を書いている。そして本作品のマーティノーウの「機械無害説」は先進国の自由貿易の優越性がそれを可能にすることを述べている。先進技術を持つ国家がどれだけ市場で有利であるか、しかし、この技術は容易に外国に流出する可能性があり、平和時の市場競争は絶えず国家間の互いの技術革新や経済成長を促進させるという主張は、R.コブデンやJ.ブライトらのマンチェスター学派(Manchester School)の主張によく似ている。このことはブローグもマーティノーウとコブデンの主張の類似を指摘していることでも理解できる¹⁵⁾。しかしマンチェスター学派の登場は1840年代のことであり、時代的にマーティノーウの方がかなり早い。特に本稿は1827年の著作であり、これは1833年から34年に書かれた『例解・経済学』(Illustration of Political Economy)以前に、彼女がこのような経済思想を持っていたことを裏づけるものである。また彼女をたびたびマンチェスター学派と結び付けて、自由放任の擁護者と位置づけする場合もあるが、その場合この時代的な「ずれ」をどのように考えたらよいのだろうか。従来のマーティノーウ研究が1830年代の『例解・経済学』に集約されていることに問題の一つがあるように思われる。

注

- 1) *Harriet Martineau's Autobiography* Volume1. Edited by Maria Weston Chapman. Smith, Elder & Co. London, 1977. (Cambridge University Press, 2010.) p.135.
- 2) Mr. Owen's Plans for Relieving the National Distress. *Collected works of Robert Torrens*, edited by G deVivo. 8vols. Bristol 1819. (Thoemmes Press)
- 3) *Harriet Martineau's Autobiography* Volume1. Edited by Maria Weston Chapman. Smith, Elder & Co. London, 1977. (Cambridge University Press, 2010.) p.138.
- 4) 「社会小説家としてのGaskell」 関田朋子 (http://www.gaskell.jp/ronshu/15/15_33-42KANDA.pdf#search='1827%E5%B9%B4+Rioters')
- 5) *Ibid.*, p.38.
- 6) *The Rioters; or A Tale of Bad Times* 1827. Willington, Salop: Houlston And son. p.16.
- 7) *Ibid.*, p.22.
- 8) *Ibid.*, p.24.

- 9) 詩編 30: 5.
- 10) 詩編 126: 5-6.
- 11) *Ibid.*, p.42.
- 12) *Ibid.*, p.66.
- 13) リカードゥは1821年の3版では、「私は機械が社会の諸階級に及ぼす影響においていくらか研究してみることにしたい。これは極めて重要な問題だが、これまで正確な、満足しうる結論に導くような研究はなされてこなかった」と述べて機械有害論を述べている。『経済学及び課税の原理』（下）リカード著、羽島・吉澤訳、岩波文庫（1987）282頁。
- 14) James Mill. *Commerce Defended. An Answer to the Arguments by which Mr. Spence, Mr. Cobbett, and Others, have attempted to Prove that Commerce is not a source of National Wealth* 1808. By C. and R. Baldwin. Printers London. 訳：岡茂男『商業擁護論』未来社。
- 15) M. Blaug *Ricardian Economics* p.135. 訳 212 頁。

参考文献

- [Blaug, M] *Ricardian Economics* Yale University Press, 1858. 『リカードゥ派の経済学』訳：馬渡・島、木鐸社（1981）。
- [Ricardo, D] David Ricardo, *The Works and Correspondence of David Ricardo, Vol. 1 Principles of Political Economy and Taxation* [1817] 3rd. chapter 31, On Machinery. 『経済学及び課税の原理』上下、訳：羽島・吉澤、岩波文庫（1987）。
- [Martineau, H.] *Rioters; or A Tale of Bad Times*. 1827. Wellington, Salop: printed by and for Houlston and son, London.
- *Harriet Martineau's Autobiography* Volume1. Edited by Maria Weston Chapman. Smith, Elder & Co. London, 1977. (Cambridge University Press, 2010.)
- [Mill, J.] *Commerce Defended. An Answer to the Arguments by which Mr. Spence, Mr. Cobbett, and Others, have attempted to Prove that Commerce is not a source of National Wealth* 1808. 『商業擁護論』訳：岡茂男、未来社（1965）。
- [Torrens, R.] Mr. Owen's Plans for Relieving the National Distress. *Collected works of Robert Torrens*, edited by G deVivo. 8vols. Bristol 1819. (Thoemmes Press)
- [河合康夫] 「ロバート・トレンズの政治活動—1830年代ボルトンでの選挙活動を中心として—」『マルサスと同時代人たち』：255-75。（飯田裕康・出雲雅志・柳田芳伸編著）日本経済評論社 2006.
- [真実一男] 『機械と失業』理論社（1959）。